

浸種の実際①

適正な浸種温度をしっかりと維持するためには、どうしたらよいのでしょうか？ 地域で実践されている方法を紹介します。

循環式催芽機 の使用

おすすめ度



循環式催芽機は11～12℃に設定すれば、浸種にも使用できます。温度が正確に保たれるだけでなく、シャワーで酸素が常に入り、もみが酸欠になるのを防ぎます。



○ メリット ○

- 手間をかけずに適正な浸種温度を確実に維持できる。

× デメリット ×

- 機材購入費用が高い。
- 使用しない時の置き場所が必要。

ポイント

- 適正な水温になってから種もみをつける。
- 機械に種もみを多く入れすぎない。
- 機械とは別の温度計でも確認する

現場で見られる失敗

- 機械が古くて、水温が十分あがっていなかった。
- まちがえて食酢を入れた。
(食酢は催芽から入れる)

浸種の実際②

凍結防止用ヒーター

おすすめ度



凍結防止用ヒーターは、浸種用の機械ではないですが、水に入れて使えば温度が下がるのを防ぐことができます。ただし、11～12℃に温度調節でき、過熱防止機能が付いた機種を選ぶ必要があります。



ポイント

- 火災防止のため、無人使用可能な機種を使用する(特定電気用品)。
- 使用前は、水にヒーターを入れてから電源を入れる(過昇防止)。
- 使用後は機械が十分さめてから水からひきあげる(過昇防止)。
- 適正な温度の水を作ってから、ヒーターを入れる(加温でなく保温用)
- ポンプで必ず水を循環する。
- 水槽の上下で水温を測定・確認する。
- 加熱部からもみを十分離す。
- 種もみの天地返しを入念にする。

○ メリット ○

- 少ない手間で適正な浸種温度を維持できる。
- 機材費は比較的安い。

× デメリット ×

- 適正な水温が確保できているか確認が必要。
- ヒーター能力に限界がある。

現場で見られる失敗

- 種もみに近づけすぎて、芽が早く出てしまった。
- ヒューズがとんだのに気づかずに使用して水温が下がった。
- 温度調節機能がない機種を使ったため、種もみが煮えた。

浸種の実際 ③

ビニールハウスを使った浸種

おすすめ度



ハウス内の水槽で浸種する。水温変動を防ぐため、断熱材、日よけなどを利用する。

毛布でしっかり
おおって日よけ

水温が下がっ
たら湯を足す

壁面にはスタイロホーム



コンパネ、鉄骨、ブルーシートを
組み立てて大型水槽を自作

こんな工夫も
(シルバーポリで
日よけ・夜間保温)

○ メリット ○

- 特殊な器材などを購入する必要がない。

× デメリット ×

- 適正な水温が確保できているか確認が必要。
- 水温の変化があり、一定温度を確保できないことがある。
- 設置のためのハウスが必要。

ポイント

- 水温を温度計でこまめに確認する。
- 日よけのふたをしっかりする。
- 壁面に断熱材を使用する、被覆するなどして保温能力を高める。
- 温度差がしやすいので、ポンプで水を循環する。
- 夜間は水温が下がるので、毎朝湯を足して、適正温度を保つ。
- 種もみの天地返しを入念に。

現場で見られる失敗

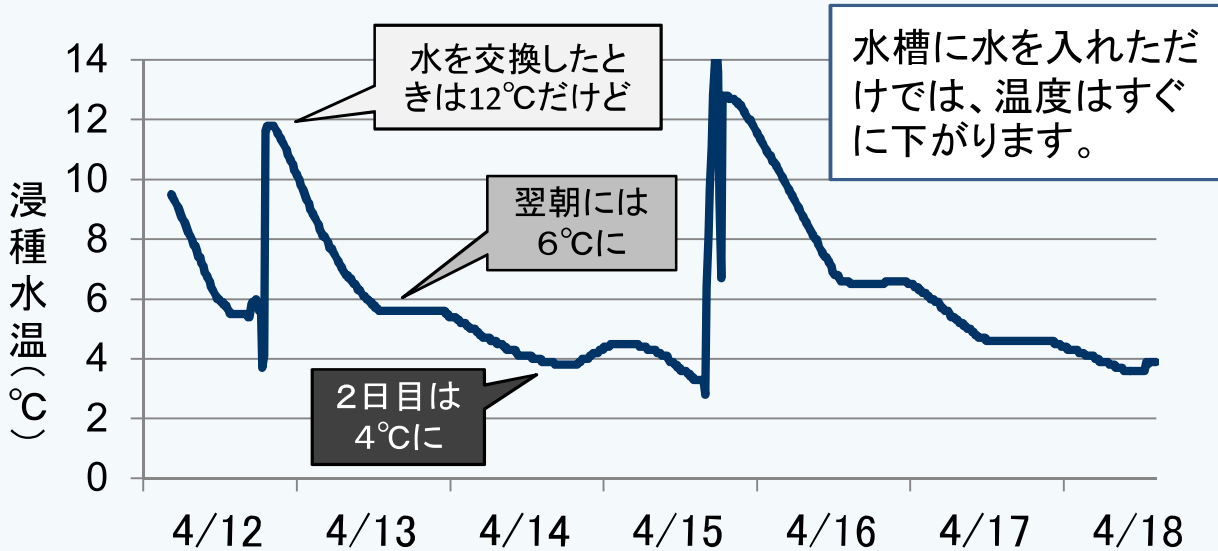
- 強い日が差して温度が上がり、上のもみの芽だけ先に出た。
- 天地返しをしなかったため、出芽ムラができた。

浸種の実際 ④

冷暗所で浸種（放置）

納屋の中などの日の当たらない寒い場所に水槽をおいて、浸種する。

**おすすめ度
やめてください**



むむむ、思ったより水温が下がっているな。
このやり方をしている人はわしの他にも結構おるぞ。
みんなにも早く教えてやらんといかん。
春先からのトラブルはもうたくさんだ。
今年からみんなできっちりやろう。

